

ソフトウェアエンジニアリング

Software Engineering

巻頭言

技術革新を実践できるソフトウェア技術者の育成

Educating Software Engineers to Advance Technological Innovation

昨年来の世界的な金融危機を契機として、改めて“堅実なモノづくり”の重要性が再認識されています。ソフトウェアは目には見えませんが、紛れもなくモノです。ソフトウェアがモノであるからには、モノづくりが必要となります。ほかの技術分野と比べて情報技術の進歩は非常に速く、新しいソフトウェア技術が次々と出現しています。また、モノであるソフトウェアシステムも年々、大規模化、複雑化、高度化、多様化の一途をたどっています。特に近年、ソフトウェアシステムの不具合による大きな社会問題が続出しています。不具合のない高品質なモノを開発するためには、モノづくりにかかわる様々な人材のスキル(能力)の高さ、成熟した開発組織、整備された方法論や道具(ソフトウェアツール)など様々な要素が要求され、ソフトウェア エンジニアリングの重要性がますます高まっています。

こうした流れのなかで、改めてソフトウェア技術者教育の必要性がクローズアップしてきています。その結果、わが国ではソフトウェア技術者育成プログラムが種々遂行されています。しかしながら、高度な技術力を持った指導的人材の育成に関しては必ずしも十分ではありません。知識が豊富であることだけでは世界と対等に競争しうる指導的人材には至りません。新しい技術に迅速に対応し、ソフトウェア開発現場で技術革新を実践できる能力、すなわち、真に役に立つ技術を見極め、自分たちの問題に創意工夫を交えて適用し解決できる能力が要求されます。堅実なモノづくりで他国をリードしていくために、わが国としては、高度な技術力に裏づけされた指導的人材がまさに必要とされます。

ソフトウェア開発現場で技術革新を実践できるこれらの人材をより多く抱える企業が、どんな経済環境になろうと、勝ち抜いていくのだと思います。ただ、企業内の教育だけでこうした人材を育成するのは簡単ではありません。そこで、企業、大学そして、国が連携協力していく必要があります。そのためには、大学は、実践に立脚した教育を組み入れることも必要ですし、産業界が求める博士を企業と協力しながら育成していくことも必要です。一方、ソフトウェア エンジニアリングが、将来の指導的人材の卵である最優秀な学生にとって、魅力のある研究テーマであってほしいと思います。



本位田 真一
HONIDEN Shinichi

国立情報学研究所 先端ソフトウェア工学・国際研究センター長

Director, Center for Global Research in Advanced Software Science and Engineering (GRACE), National Institute of Informatics (NII)